



獲物であるカエルを鎌状の前脚でがっちり抑え込み、鋭い口吻で血肉を吸う大型水生昆虫・タガメ。日本の夫婦関係をこの両者に見立てた「日本の男を喰い尽くすタガメ女の正体」講談社(α新書)『写真』が、タイトルの過激さから話題となっている。しかし著者である深尾葉子・大阪大准教授(社会生態学)の真意は、「タガメ女」に対する批判とは別のところにあるという。(内田郁恵)

夫婦もがく女ハメタガ

本音抑え「幸せ」の体裁保つ

深尾・大阪大准教授「息苦しさ自覚を」



日本の男を喰い尽くすタガメ女の正体

目で、経済的、精神的に支配していく「タガメ女」。深尾さんはそう定義した。カエル男は自らの移ぎにもかかわらず、住宅ローン返済のために毎月少しの小遣いで過ごし、誘いには「女房に聞いてみないと」と答える。一見、家族思いのようだが、実はタガメ女に支配され、自分で判断できなくなっている。

一方のタガメ女は、自慢のマイホームや分譲マンションで家事をこなし、「ママ友」付き合いや習い事にも忙しい。家庭内も人間関

係も充実している自分というイメージを演出し、夫にそうした自分を守ると約束させて、さらに制約を強める、という。

ムラ社会気質が強い日本では、本音を抑え、周囲に合わせることはとされる。「エリート」とされる層ではその傾向が顕著だ。

会社で順調に出世していく夫、マイホームで家庭を守る妻という姿が「幸せ」の象徴とされてきた。高度成長期のみならず、日本経済が停滞してからも、その価値観は揺らいでいない。ところが現実はおかつてのようにはいかない。それでも「幸せ」の体裁を保つのに

必死なタガメ女は、周囲の人間関係を意のままに動かそうとする。自己主張することで疎外されるのを恐れるカエル男は、家庭でも社会でも、いさかきをますます避ける。

深尾さんは、こうした人々を「ハタガメ」にはめられすぎて無理をしているとみる。「ハタガメ」とは、自分以外の誰かから押しつけられている価値観だ。着想のきっかけは、中国農村部でのフィールドワークだった。言いたいことを遠慮なくぶつけ合う中国社会に比べ、本音を抑え込まないと生きづらい日本の現状に息苦しさを覚え、自らもまた「ハタガメ」とらわれていたことに気づいたのだという。

今春に本を出版すると、主に主婦やエリートサラリーマン、つまりタガメ女やカエル男「当人」から「なぜ批判されなくてはならないのか」と怒りの声が続



日本の女、男を苦しめる「ハタガメ」について話す深尾葉子さん(森田昌孝撮影)